

2 周溝の巡る住居について

1 はじめに

三和工業団地 I 遺跡では、竪穴住居の周囲に周溝の巡る住居と、竪穴住居の隅から溝が延びる住居をそれぞれ 1 軒づつ確認した(本文26・31頁参照)。いずれも古墳時代前期に属し、両方の住居に付帯する溝が接続することから、同時存在した可能性が高い。

一方、これに近似した遺構は群馬県佐波郡玉村町の上之手八王子遺跡に存在し、近年の北関東自動車道建設に伴う前橋地区発掘調査の横手井戸南遺跡、中内村前遺跡でも確認されている。これらの遺構も古墳時代前期に属することから、代表的な例についてその形態や年代についての比較・検討を行い、そこから派生する問題について検討してみたい。

2 周溝の巡る住居の概観

(1) 三和工業団地 I 遺跡の例

9号住居 竪穴住居の部分は長軸6.2m、短軸5.9m、確認面からの深さ60cmのほぼ正方形を呈し、壁内に4個の支柱穴と地床炉、貯蔵穴を備え、伴出遺物から古墳時代前期に比定できる。

住居の南東隅から上幅70cm、下幅20cm、深さ60cmの溝が掘られている。この溝は住居の周囲を巡ることなく、東側の低地部にかけてほぼ直線的に60mほど延び、住居の東側約10mの地点で12号住居に付帯

する溝と接続している。この接続の状況は、両方の溝が直接的に接続するのではなく、溝の上端は約50cmを残して止まり、底面で幅20cm、高さ50cmのトンネル状に掘り抜いて接続している。溝の底面は住居の構築面と全く同一レベルである。

12号住居 竪穴住居の部分は長軸5.5m、短軸4.8m、確認面からの深さで70cmの長軸を東西にもつ長方形を呈し、壁内に4個の支柱穴と地床炉、貯蔵穴を備える。伴出遺物から9号住居と同様に古墳時代前期に比定でき、それぞれに付帯する溝が接続していることから、9号住居と同時存在したものと考えられる。

住居の北側を半円形状に上幅70cm、下幅20cm、深さ70cmの溝が巡り、この溝は住居の南東側に延びて、9号住居から掘られた溝と接続する一方で、住居南壁から南へ直線的に約3m延びた溝が、東側に直角に折れて住居の周囲を巡る溝に接続する。住居との接続部及び溝と溝との接続部はいずれも直接的に接続するのではなく、溝の上端は約30~50cmを残して寸前で止まり、底面でトンネル状に掘り抜いて接続している。住居との接続部において、溝の底面のレベルは住居の構築面と全く同一レベルで、住居との接続部と80m東側の確認した溝の東端部との比高差は約25cmで、約0.3%の下り勾配にすぎない。

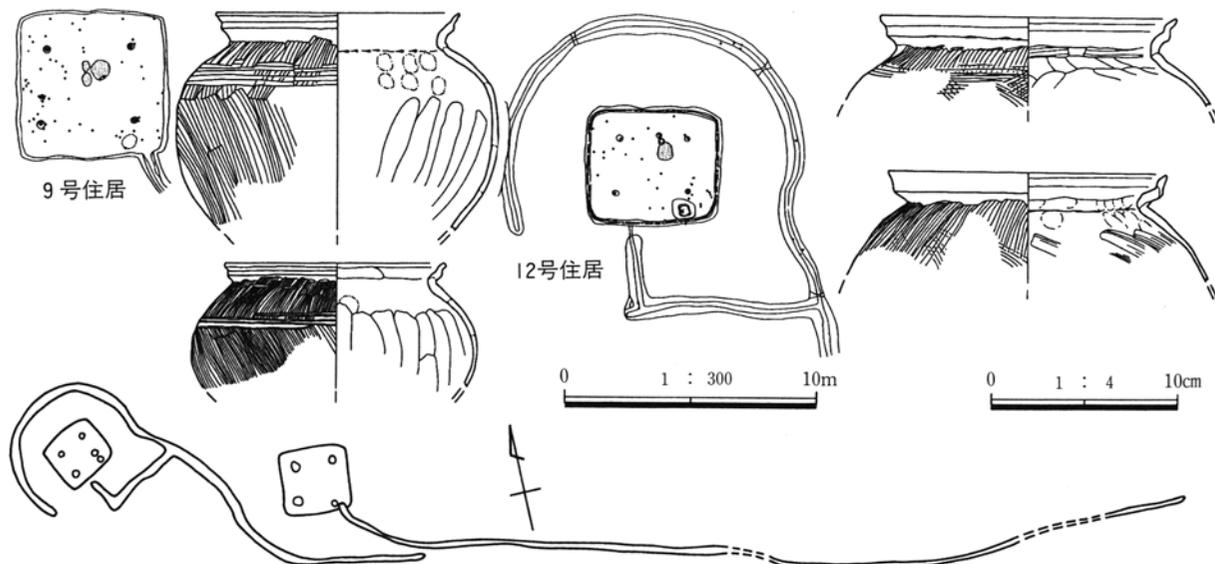


図1 三和工業団地 I 遺跡 9・12号住居・出土遺物

(2) 上之手八王子遺跡(佐波郡玉村町)の例

BH-176 住居の部分は一辺約5.9mのほぼ正方形を呈し、確認面からの深さは約3cmで、壁内に4個の支柱穴と地床炉を備え、伴出遺物から古墳時代前期に比定できる。周溝は2重に巡り、内側の溝は住居の南側に、外側の溝は南東部にそれぞれ途切れた部分がある。いずれも確認面からの深さは10cmほどと浅く、外側の溝は南東に向かって延びる。

上之手八王子遺跡では、BH-176も含めて5軒の周溝の巡る住居が確認されているが、いずれも周溝の深さが浅いことと、周溝と住居とを繋ぐ溝が存在しないことに共通点があり、年代的にはいずれも古墳時代前期に属す。

(3) 大平遺跡(静岡県浜松市)の例

SB27 竪穴住居の部分は長軸9.0m、短軸8.6mから、長軸6.7m、短軸6.6mへの縮小した建て替えて、確認面からの深さ30cmのほぼ正方形を呈し、壁内に4個の支柱穴と地床炉を備え、伴出遺物から古墳時代前期に比定できる。

住居の周囲を幅70cm、深さ30cmの溝が南方を除いて巡り、北西部で分岐した溝が北側の低地部にかけて延びる。住居西方の溝は南端部で折れて住居の南西隅に接続するが、住居との接続部は直接的に接続

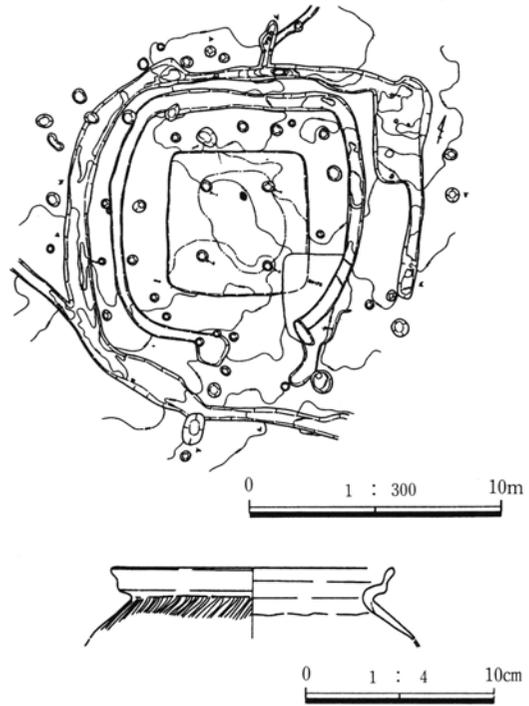


図2 上之手八王子遺跡BH-176・出土遺物

するのではなく、溝の上端は約50cmを残して寸前で止まり、底面でトンネル状に掘り抜いて接続する。溝が接続する住居の南西隅には、床面に石敷きが施される。

SB08・09・12・13 いずれも一辺5mほどの隅丸

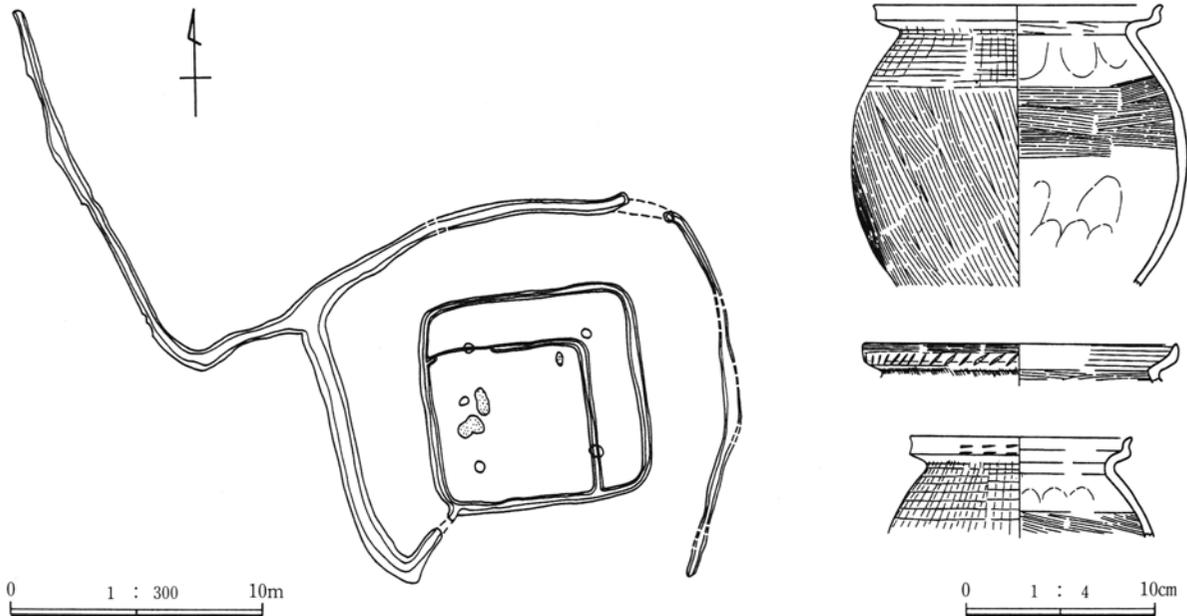


図3 大平遺跡SB27・周堀出土遺物

方形を呈し、確認面からの深さ30cmで、壁内に4個の支柱穴と地床炉を備え、伴出遺物から古墳時代前期に比定できる。

S B12の南西隅から掘られた溝は、住居の周囲を巡ることなく南東側の低地部にかけて延び、同様に掘られたS B13の溝と下流で合流する。いずれの溝

も、住居との接続部は直接的に接続するのではなく、溝の上端は約50cmを残して寸前で止まり、底面でトンネル状に掘り抜いて接続する。さらに、S B12・S B13の溝は下流でS B08・09の2軒の住居から掘られた溝と接続し、合計で4軒の住居が溝で樹枝状に繋がる。

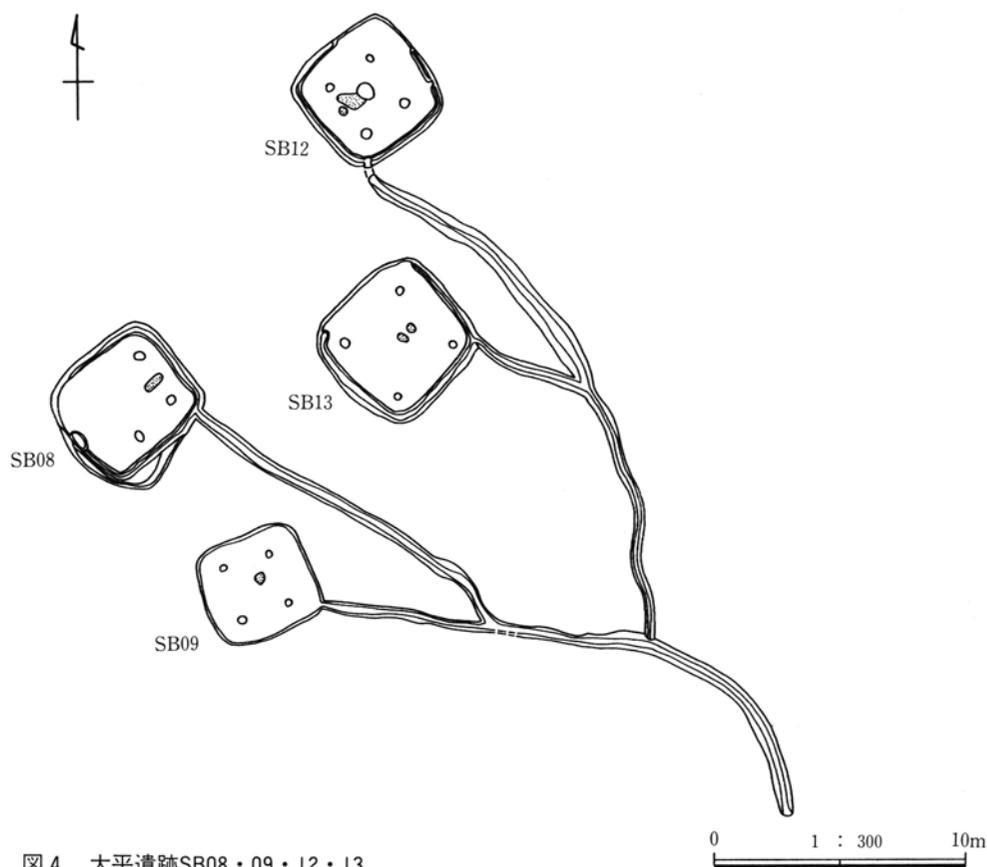


図4 大平遺跡SB08・09・12・13

3 類例の比較・検討

周溝の巡る住居の代表的な例についてみてきたが、これらを比較するといくつかの近似した点や相違点が認められる。

まずは伴出土器にみるこれらの年代であるが、それぞれ地域が異なるため、土器の様相が異なっている。したがって、ここでは共通して出土しているS字状口縁台付甕を基準として検討してみたい。

大平遺跡S B27の周溝に伴出するS字状口縁台付甕は、膨らみの少ない胴部、水平気味に外反して垂直に近い状態で短く立ち上がる口縁部、肩部の横刷毛目の特徴が、東海地方西部における赤塚次郎氏によるS字状口縁台付甕の編年⁽³⁾(以下同様)のA類に比

定できる。しかし、これらは他の土師器との共伴関係から残存形態としてのA類で、年代としてはむしろB類の古段階に平行する段階に比定できるとのことである⁽⁴⁾。次に三和工業団地I遺跡12号住居は、下半部が長く上半部が短い口縁部、肩部の1条の横刷毛目の特徴がB類の中葉段階に比定できる。また、上之手八王子遺跡BH-176は、下半部が短く上半部が長い口縁部の特徴がC～D類に平行する段階に比定できよう。

したがって、ここに提示した住居では、大平遺跡S B27が最も古く、次に三和工業団地I遺跡9・12号住居で、上之手八王子遺跡BH-176が最も新しいことになる。

一方、溝の形態であるが、確認面が異なるために単純な比較はできないものの、大平遺跡S B27・08・09・12・13と三和工業団地 I 遺跡9・12号住居は、断面が逆台形状で深く掘り込まれる。これに対して上之手八王子遺跡BH-176は、断面が急激な立ち上がりを示すことなく緩やかで、掘り込みは比較的浅いものと推定される。

また、大平遺跡と三和工業団地 I 遺跡には、いずれも溝が住居の周囲に巡るものと、住居の隅から溝が延びるものの2種類が存在し、周囲を巡るものについては、これと住居とを繋ぐ溝が存在する。これに対して、BH-176を含めた上之手八王子遺跡には住居とを繋ぐ溝は存在しない。さらに、大平遺跡S B27・12・13と三和工業団地 I 遺跡12号住居は、住居に接続する溝が底面でトンネル状に繋がることと、複数の住居の溝が合流するという共通点を持っている。

4 まとめ

周溝の巡るいくつかの住居について、その形態の比較を行ってきたが、その特徴をまとめると以下のようなになる。

- ①大平遺跡と三和工業団地 I 遺跡は、S字状口縁台付甕のB類段階で、年代的に比較的近接している。
- ②周溝の断面は、大平遺跡と三和工業団地 I 遺跡が逆台形状で深いのに対して、上之手八王子遺跡は緩やかに立ち上がって浅いものと推定される。
- ③大平遺跡と三和工業団地 I 遺跡は、溝が住居の周囲を巡るものと、住居から直接掘られるものの2種類が存在するが、上之手八王子遺跡には住居から直接掘られるものが存在しない。
- ④大平遺跡と三和工業団地 I 遺跡は、住居と周囲を巡る溝が繋がっているが、上之手八王子遺跡は繋がっていない。
- ⑤大平遺跡と三和工業団地 I 遺跡は、複数の住居の溝が繋がっているが、上之手八王子遺跡にはこの状況がみられない。
- ⑥大平遺跡と三和工業団地 I 遺跡は、住居と溝との接続部がトンネル状になる。

以上のことから、大平遺跡と三和工業団地 I 遺跡には共通した要素が多く認められるのに対して、上之手八王子遺跡はその形態や年代的に相違する点が多い。

大平遺跡と三和工業団地 I 遺跡に関しては、酷似した形態で近接した年代であることと、同様な類別が東海地方の東部と群馬県との間に位置する地域に認められないことを考え併せると、これらは住居の構築方法の伝播と言うより、東海地方東部からの直接的な移住とみるのが妥当と考えられる。

一方、上之手八王子遺跡は様相が大きく異なり、その年代的な相違も含めて、三和工業団地 I 遺跡と同じ系譜にあるものとは考え難い。おそらくこの背景は異なるものと考えられ、近似した遺構ではあるがいわば「上之手八王子遺跡型」と、「三和工業団地 I 遺跡型」の分類が可能である。したがって、飯島義雄氏による「周溝をもつ建物」に関する重要な指摘⁽⁵⁾も含めて、同様な遺構の系譜とその背景の追求が今後の課題となろう。

【注】

- (1) 玉村町教育委員会 『上之手八王子遺跡』 1991
- (2) (財) 浜松市文化協会 『佐鳴湖西岸遺跡群』 1992
- (3) 赤塚次郎「最後の台付甕」『古代』第86号早稲田大学考古学会 1988、赤塚次郎「土器・土器群の形成」『廻間遺跡』(財) 愛知県埋蔵文化財センター 1990
- (4) 大平遺跡の調査・整理を担当された浜松市博物館の鈴木敏則氏にご教示を頂いた。
- (5) 飯島義雄氏は、従来「周溝墓」とされていた遺構のなかには、「周溝をもつ建物」と理解すべきものが存在するという指摘を行っている。飯島義雄 「古墳時代前期における「周溝をもつ建物」の意義」『群馬県立歴史博物館紀要』第19号 群馬県立歴史博物館 1998